

---

## IBM i (IBM System i) の仮想装置の活用

-----テープ媒体保管ライブラリーを、DVD-R(CD)メディアにするメリット-----

---

V5R4から仮想記憶装置がサポートされるようになりました。  
その2つの装置を、簡単にご紹介します。

### 仮想磁気テープ

仮想磁気テープ(1)は、ご使用のシステムに、次のような多くの機能拡張をもたらします。

- ・従来の媒体形式以上の可用性
- ・バックアップ時間の短縮
- ・バックアップ時に追加ボリュームが必要な場合、自動的に追加ボリュームを作成
- ・同一仮想テープやボリュームからの、複数の同時読み取り操作をサポート等が挙げられます。

1: ディスク上に仮想的なドライブとメディア(テープボリューム)を作成し、それに対して保管を行ったり、復元元(ふくげんもと)として選択することができます。

### 仮想光ディスク記憶

仮想光ディスク記憶を使用すると、ご使用のシステム・ディスク装置上に存在する、仮想CDまたはDVDイメージを作成し、仮想イメージを実際のCDなどの媒体にコピーすることができます。

イメージサイズを指定することによって、CDやDVDのイメージを作成することができます。そして作成された実際の媒体を用いて、OPT01などの装置デバイスから、復元することが可能になります。

操作方法は以下の通りです。(詳細は省略しています)

1. 仮想光ディスク装置を作成して、オンに構成変更(使用可能状態に)する。
2. 仮想光ディスクイメージを作成する。
3. イメージ・カタログをロードする。
4. 仮想光ディスクイメージを、仮想光ディスク装置にマウントする。
5. 仮想光ディスク装置に保管する。
6. イメージファイルをPCへ移動(無変換)する。
7. PCでイメージ焼き付けソフトウェアを使用して、イメージをCDまたはDVDに焼き付ける。
8. 実際に読みこみが可能か、IBM iで確認する。

テープ媒体に比べCDやDVDは媒体の単価も安く、一時保管に使用しても数十円程度で済みます。開発時や配布用、活動ログのファイル保管など、

テープ媒体に保管しておくにはもったいないケースでは、光ディスク媒体にしておくのが経済的です。

V5R4 以前のマシンでは、CD を作成できないのですか？

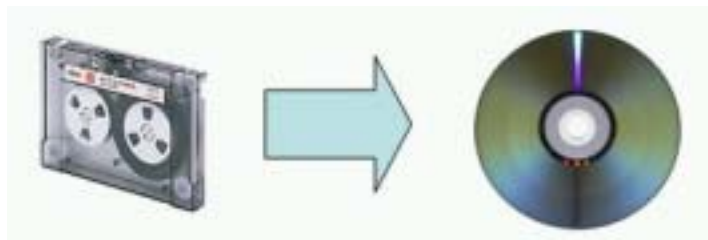
可能です。

**仮想記憶装置は V5R4 からの機能ですが、CD イメージの作成は以前からできました。(V5R2 からの仮想光ディスク装置ではありません)**

手順は以下のとおりです。

1. ライブラリーなどの対象を、実際のテープ装置に保管する。  
SAVLIB や SAVOBJ コマンドで USEOPTBLK(\*NO)を必ず指定する。
2. テープの内容を物理ファイルにコピーする。  
事前に物理ファイルを作成しておく。  
CRTPF FILE(Library/File)  
RCDLEN(28672) MBR(\*NONE) MAXMBRS(\*NOMAX) SIZE(\*NOMAX)  
CPYFRMTAP コマンドで、テープ装置からその物理ファイルにコピーする。
3. FTP などを利用して PC へ転送する。
4. PC でイメージ焼き付けソフトウェアを使用して、イメージを CD または DVD に焼きつける。
5. 実際に読めるか IBM i で確認する。  
ご注意:実際の CD、DVD に書き込めるサイズである必要があります。  
マルチボリュームには対応できません。

テープ媒体保管ライブラリーを、DVD-R(CD)メディアにしませんか



#### ライブラリー名の重複に注意

過去にバックアップされたテープなどを保管している場合、AS/400 から IBM i などに機種変更した時に、共通媒体がなく困るケースが多くあります。内容が本当に必要か、判断もむずかしいこともあります。そのためのメディア変換(媒体変換)などは、費用がかかり無駄かもしれません。この場合は、機種変更前に仮に復元して、内容を確認しておく必要があります。(最低カタログを出力)

テープへの保管時に USEOPTBLK(\*NO)を指定されていないケースでは、テープのブロック長が最適化されていて、媒体変換もできません。(SAVLIB のときの省略値は \*YES)

過去にバックアップされたテープを一度復元して保管し直すとき、同じライブラリー名が既に存在していた場合は、別名にして復元する必要があります。

一本のテープに同じものが2度以上入っている場合は、さらに大変です。  
その場合は、自動別名復元ツールがありますので、ご相談ください。

機種変更前や保管媒体の整理を行う際に、テープから CD や DVD への移行を検討されてはいかがでしょうか？

解説:アプリケーションマネジメントサービス部 大村 兼一